黄いろのトマト

宮沢賢治

博物局十六等官
キュステ誌

私の町の博物館の、大きなガラスの戸棚(とだな)には、剝製(はくせい)ですが、四疋(ひき)の蜂雀(はちすずめ)がいます。

生きてたときはミィミィとなき蝶(ちょう)のように花の蜜(みつ)をたべるあの小さなかあいらしい蜂雀です。わたくしはその四疋の中でいちばん上の枝(えだ)にとまって、羽を両方ひろげかけ、まっ青なそらにいまにもとび立ちそうなのを、ことにすきでした。それは眼(め)が赤くてつるつ

るした緑青(ろくしょう)いろの胸をもち、そのりんと張った胸には波形のうつくしい紋(もん)もありました。

小さいときのことですが、ある朝早く、私は学校に行く前にこっそり一寸(ちょっと)ガラスの前に立ちましたら、その蜂雀が、銀の針の様なほそいきれいな声で、にわかに私に言いました。

「お早う。ペムペルという子はほんとうにいい子だったのにかあいそうなことをした。」

その時窓にはまだ厚い茶いろのカーテンが引いてありましたので室(へや)の中はちょうどビール瓶(びん)のかけらをのぞいたようでした。ですから私も挨拶(あいさつ)しました。

「お早う。 蜂雀。 ペムペルという人がどうしたっての。」

蜂雀がガラスの向うで又云（またい）いました。

「ええお早うよ。 妹のネリという子もほんとうにかあいらしいいいい子だったのにかあいそうだなあ。」

「どうしたていうの話しておくれ。」

すると蜂雀はちょっと口あいてわらうようにしてまた云いました。

「話してあげるからおまえは鞄（かばん）を床（ゆか）におろしてその上にお座（すわ）り。」

私は本の入ったかばんの上に座るのは一寸困りまし

たけれどもどうしてもそのお話を聞きたかったのでとうとうその通りしました。

すると蜂雀は話しました。

「ペムペルとネリは毎日お父さんやお母さんたちの働くそばで遊んでいたよ〔以下原稿一枚?なし〕

その時僕（ぼく）も

『さようなら。さようなら。』と云ってペムペルのうちのきれいな木や花の間からまっすぐにおうちにかえった。

それから勿論（もちろん）小麦も搗（つ）いた。

　二人で小麦を粉にするときは僕はいつでも見に行った。小麦を粉にする日ならペムペルはちぢれた髪(かみ)からみじかい浅黄(あさぎ)のチョッキから木綿(もめん)のだぶだぶずぼんまで粉ですっかり白くなりながら赤いガラスの水車場でことことやっているだろう。ネリはその粉を四百グレンぐらいずつ木綿の袋(ふくろ)につめ込(こ)んだりつかれてぼんやり戸口によりかかりはたけをながめていたりする。

　そのときぼくはネリちゃん。あなたはむぐらはすきですかとからかったりして飛んだのだ。それからもちろんキャベジも植えた。

　二人がキャベジを穫(と)るときは僕はいつでも見に行っ

た。

ペムペルがキャベジの太い根を截(き)ってそれをはたけにころがすと、ネリは両手でそれをもって水いろに塗(ぬ)られた一輪車に入れるのだ。そして二人は車を押(お)して黄色のガラスの納屋(なや)にキャベジを運んだのだ。青いキャベジがころがってるのはそれはずいぶん立派だよ。

そして二人はたった二人だけずいぶんたのしくくらしていた。」

「おとなはそこらに居なかったの。」わたしはふと思い付いてそうたずねました。

「おとなはすこしもそこらあたりに居なかった。なぜ

ならペムペルとネリの兄妹(きょうだい)の二人はたった二人だけずいぶん愉快(ゆかい)にくらしてたから。
けれどほんとうにかあいそうだ。
ペムペルという子は全くいい子だったのにかあいそうなことをした。
ネリという子は全くかあいらしい女の子だったのにかあいそうなことをした。」
蜂雀は俄(にわ)かにだまってしまいました。
私はもう全く気が気でありませんでした。
蜂雀はいよいよだまってガラスの向うでしんとしています。

私もしばらくは耐（こら）えて膝（ひざ）を両手で抱（かか）えてじっとしていましたけれどもあんまり蜂雀がいつまでもだまっているもんですからそれにそのだまりようと云ったらたとえ一ぺん死んだ人が二度とお墓から出て来ようたって口なんか聞くもんかと云うように見えましたのでとうとう私は居たたまらなくなりました。私は立ってガラスの前に歩いて行って両手をガラスにかけて中の蜂雀に云いました。

「ね、蜂雀、そのペムペルとネリちゃんとがそれから一体どうなったの、どうしたって云うの、ね、蜂雀、話してお呉（く）れ。」

けれども蜂雀はやっぱりじっとその細いくちばしを尖らしたまま向うの四十雀の方を見たっきり二度と私に答えようともしませんでした。

「ね、蜂雀、談してお呉れ。だめだい半分ぐらい云っておいていけないいったら蜂雀ね。談してお呉れ。そら、さっきの続きをさ。どうして話して呉れないの。」

ガラスは私の息ですっかり曇りました。

四羽の美しい蜂雀さえまるでぼんやり見えたのです。私はとうとう泣きだしました。

なぜって第一あの美しい蜂雀がたった今まできれい

な銀の糸のような声で私と話をしていたのに俄かに硬(かた)く死んだようになってその眼もすっかり黒い硝子玉(ガラスだま)か何かになってしまいいつまでたっても四十雀ばかり見ているのです。おまけに一体それさえほんとうに見ているのかただ眼がそっちへ向いてるように見えるのか少しもわからないのでしょう。それにまたあんなかあいらしい日に焼けたペムペルとネリの兄妹が何か大へんかあいそうな目になったというのですものどうして泣かないでいられましょう。もう私はその為(ため)ならば一週間でも泣けたのです。

すると俄かに私の右の肩(かた)が重くなりました。そして

何だか暖いのです。びっくりして振りかえって見ましたらあの番人のおじいさんが心配そうに白い眉を寄せて私の肩に手を置いて立っているのです。その番人のおじいさんが云いました。

「どうしてそんなに泣いて居るの。おなかでも痛いのかい。朝早くから鳥のガラスの前に来てそんなにひどく泣くもんでない。」

けれども私はどうしてもまだ泣きやむことができませんでした。おじいさんは又云いました。

「そんなに高く泣いちゃいけない。

まだ入口を開けるに一時間半も間があるのにおまえ

だけそっと入れてやったのだ。

それにそんなに高く泣いて表の方へ聞えたらみんな私に故障を云って来るんでないか。そんなに泣いていけないよ。どうしてそんなに泣いてんだ。」

私はやっと云いました。

「だって蜂雀がもう私に話さないんだもの。」

するとじいさんは高く笑いました。

「ああ、蜂雀が又おまえに何か話したね。そして俄かに黙(だま)り込んだね。そいつはいけない。この蜂雀はよくその術をやって人をからかうんだ。よろしい。私が叱(しか)ってやろう。」

番人のおじいさんはガラスの前に進みました。

「おい。蜂雀。今日で何度目だと思う。手帳へつけるよ。つけるよ。あんまりいけなけあ仕方ないから館長様へ申し上げてアイスランドへ送っちまうよ。

ええおい。さあ坊ちゃん。きっとこいつは談します。早く涙をおふきなさい。まるで顔中ぐじゃぐじゃだ。そらええああすっかりさっぱりした。

お話がすんだら早く学校へ入らっしゃい。

あんまり長くなって厭きっちまうとこいつは又いろいろいやなことを云いますから。ではようがすか。」

番人のおじいさんは私の涙を拭いて呉れてそれから

両手をせなかで組んでことりことり向うへ見まわって行きました。
おじいさんのあし音がそのうすくらい茶色の室の中から隣りの室へ消えたとき蜂雀はまた私の方を向きました。
私はどきっとしたのです。
蜂雀は細い細いハアモニカの様な声でそっと私にはなしかけました。
「さっきはごめんなさい。僕すっかり疲れちまったもんですからね。」
私もやさしく言いました。

「蜂雀。僕ちっとも怒(おこ)っちゃいないんだよ。さっきの続きを話してお呉れ。」

　蜂雀は語りはじめました。

「ペムペルとネリとはそれはほんとうにかあいいんだ。二人が青ガラスのうちの中に居て窓をすっかりしめてると二人は海の底に居るように見えた。そして二人の声は僕には聞えやしないね。

　それは非常に厚いガラスなんだから。

　けれども二人が一つの大きな帳面をのぞきこんで一所に同じように口をあいたり少し閉じたりしているのを見るとあれは一緒(いっしょ)に唱歌をうたっているのだという

ことは誰(たれ)だってすぐわかるだろう。僕はそのいろいろにうごく二人の小さな口つきをじっと見ているのを大へんすきでいつでも庭のさるすべりの木に居たよ。ペムペルはほんとうにいい子なんだけれどかあいそうなことをした。

ネリも全くかあいらしい女の子だったのにかあいそうなことをした。」

「だからどうしたって云うの。」

「だからね、二人はほんとうにおもしろくくらしていたのだから、それだけならばよかったんだ。ところが二人は、はたけにトマトを十本植えていた。そのうち

五本がポンデローザでね、五本がレッドチェリイだよ。ポンデローザにはまっ赤な大きな実がつくし、レッドチェリーにはさくらんぼほどの赤い実がまるでたくさんできる。ぼくはトマトは食べないけれど、ポンデローザを見ることならもうほんとうにすきなんだ。ある年やっぱり苗が二いろあったから、植えたあとでも二いろあった。だんだんそれが大きくなって、葉からはトマトの青いにおいがし、茎からはこまかな黄金の粒のようなものも噴き出した。

そしてまもなく実がついた。

ところが五本のチェリーの中で、一本だけは奇体に

黄いろなんだろう。そして大へん光るのだ。ギザギザの青黒い葉の間から、まばゆいくらい黄いろなトマトがのぞいているのは立派だった。だからネリが云(い)った。

『にいさま、あのトマトどうしてあんなに光るんでしょうね。』

ペムペルは唇(くちびる)に指をあててしばらく考えてから答えていた。

『黄金(きん)だよ。黄金だからあんなに光るんだ。』

『まあ、あれ黄金なの。』ネリがすこしびっくりしたように云った。

『立派だねえ。』

『ええ立派だわ。』

そして二人はもちろん、その黄いろなトマトをとりもしなけぁ、一寸(ちょっと)さわりもしなかった。

そしたらほんとうにかあいそうなことをしたねえ。」

「だからどうしたって云うの。」

「だからね、二人はこんなに楽しくくらしていたんだからそれだけならばよかったんだよ。ところがある夕方二人が羊歯(しだ)の葉に水をかけてたら、遠くの遠くの野はらの方から何とも云えない奇体ないい音が風に吹(ふ)き飛ばされて聞えて来るんだ。まるでまるでいい音なんだ。切れ切れになって飛んでは来るけれど、まるです

ずらんやヘリオトロープのいいかおりさえするんだろう、その音がだよ。二人は如露(じょろ)の手をやめて、しばらくだまって顔を見合せたねえ、それからペムペルが云った。

『ね、行って見ようよ、あんなにいい音がするんだもの。』

ネリは勿論(もちろん)、もっと行きたくってたまらないんだ。

『行きましょう、兄さま、すぐ行きましょう。』

『うん、すぐ行こう。大丈夫(だいじょうぶ)あぶないことないね。』

そこで二人は手をつないで果樹園を出てどんどんそっちへ走って行った。

音はよっぽど遠かった。樺(かば)の木の生えた小山を二つ越(こ)えてもまだそれほどに近くもならず、楊(やなぎ)の生えた小流れを三つ越えてもなかなかそんなに近くはならなかった。

それでもいくらか近くはなった。

二人が二本の榧(かや)の木のアーチになった下を潜(くぐ)ったら不思議な音はもう切れ切れじゃなくなった。

そこで二人は元気を出して上着の袖(そで)で汗(あせ)をふきふきかけて行った。

そのうち音はもっとはっきりして来たのだ。ひょろひょろした笛(ふえ)の音も入っていたし、大喇叭(おおらっぱ)のどなり声

もきこえた。ぼくにはみんなわかって来たのだよ。

『ネリ、もう少しだよ、しっかり僕につかまっておいで。』

ネリはだまってきれで包んだ小さな卵形の頭を振って、唇を嚙んで走った。

二人がも一度、樺の木の生えた丘をまわったとき、いきなり眼の前に白いほこりのぼやぼや立った大きな道が、横になっているのを見た。その右の方から、さっきの音がはっきり聞え、左の方からもう一団り、白いほこりがこっちの方へやって来る。ほこりの中から、チラチラ馬の足が光った。

間もなくそれは近づいたのだ。ペムペルとネリとは、手をにぎり合って、息をこらしてそれを見た。

もちろん僕もそれを見た。

やって来たのは七人ばかりの馬乗りなのだ。

馬は汗をかいて黒く光り、鼻からふうふう息をつき、しずかにだくをやっていた。乗ってるものはみな赤シャツで、てかてか光る赤革（あかかわ）の長靴（ながぐつ）をはき、帽子（ぼうし）には鷺（さぎ）の毛やなにか、白いひらひらするものをつけていた。鬚（ひげ）をはやしたおとなも居れば、いちばんしまいにはペムペル位の頬（ほほ）のまっかな眼のまっ黒なかぁいい子も居た。ほこりの為にお日さまはぼんやり赤くなった。

おとなはみんなペムペルとネリなどは見ない風して行ったけれど、いちばんしまいのあのかあいい子は、ペムペルを見て一寸（ちょっと）唇に指をあててキスを送ったんだ。

そしてみんなは通り過ぎたのだ。みんなの行った方から、あのいい音がいよいよはっきり聞えて来た。まもなくみんなは向うの丘をまわって見えなくなったが、左の方から又誰（またたれ）かゆっくりやって来るのだ。

それは小さな家ぐらいある白い四角の箱（はこ）のようなもので、人が四五人ついて来た。だんだん近くになって見ると、ついて居るのはみんな黒ん坊で、眼ばかりぎらぎら光らして、ふんどしだけして裸足（はだし）だろう。白い

四角なものを囲んで来たのだけれど、その白いのは箱じゃなかった。実は白いきれを四方にさげた、日本の蚊帳（かや）のようなもんで、その下からは大きな灰いろの四本の脚（あし）が、ゆっくりゆっくり上ったり下ったりしていたのだ。

ペムペルとネリとは、黒人はほんとうに恐（こわ）かったけれど又面白（おもしろ）かった。四角なものも恐かったけれど、めずらしかった。そこでみんなが過ぎてから、二人は顔を見合せた。そして

『ついて行こうか。』

『ええ、行きましょう。』と、まるでかすれた声で云っ

たのだ。そして二人はよほど遠くからついて行った。

黒人たちは、時々何かわからないことを叫(さけ)んだり、空を見ながら跳(は)ねたりした。四本の脚はゆっくりゆっくり、上ったり下ったりしていたし、時々ふう、ふうという呼吸の音も聞えた。

二人はいよいよ堅(かた)く手を握(にぎ)ってついて行った。

そのうちお日さまは、変に赤くどんよりなって、西の方の山に入ってしまい、残りの空は黄いろに光り、草はだんだん青から黒く見えて来た。

さっきからの音がいよいよ近くなり、すぐ向うの丘のかげでは、さっきのらしい馬のひんひん啼(な)くのも鼻

をぶるるっと鳴らすのも聞えたんだ。

　四角な家の生物が、脚を百ぺん上げたり下げたりしたら、ペムペルとネリとはびっくりして眼を擦(こす)った。向うは大きな町なんだ。灯(ひ)が一杯(いっぱい)についている。それからすぐ眼の前は平らな草地になっていて、大きな天幕(テント)がかけてある。天幕は丸太で組んである。まだ少しあかるいのに、青いアセチレンや、油煙(ゆえん)を長く引くカンテラがたくさんともって、その二階には奇麗(きれい)な絵看板がたくさんかけてあったのだ。その看板のうしろから、さっきからのいい音が起っていたのだ。看板の中には、さっきキスを投げた子が、二疋(ひき)の馬に片っ方

ずつ手をついて、逆立(さかだ)ちしてる処(ところ)もある。さっきの馬はみなその前につながれて、その他(ほか)にだって十五六疋ならんでいた。みんなオートを食べていた。

おとなや女や子供らが、その草はらにたくさん集って看板を見上げていた。

看板のうしろからは、さっきの音が盛(さか)んに起った。けれどもあんまり近くで聞くと、そんなにすてきな音じゃない。

ただの楽隊だったんだい。

ただその音が、野原を通って行く途中(とちゅう)、だんだん音がかすれるほど、花のにおいがついて行ったんだ。

白い四角な家も、ゆっくりゆっくり中へはいって行ってしまった。
中では何かが細い高い声でないた。
人はだんだん増えて来た。
楽隊はまるで馬鹿のように盛んにやった。
みんなは吸いこまれるように、三人五人ずつ中へはいって行ったのだ。
ペムペルとネリとは息をこらして、じっとそれを見た。
『僕たちも入ってこうか。』ペムペルが胸をどきどきさせながら云った。

『入りましょう』とネリも答えた。

けれども何だか二人とも、安心にならなかったのだ。

どうもみんなが入口で何か番人に渡(わた)すらしいのだ。

ペムペルは少し近くへ寄って、じっとそれを見た。

食い付くように見ていたよ。

そしたらそれはたしかに銀か黄金(きん)かのかけらなのだ。

黄金をだせば銀のかけらを返してよこす。

そしてその人は入って行く。

だからペムペルも黄金をポケットにさがしたのだ。

『ネリ、お前はここに待っといで。僕一寸(ちょっと)うちまで行って来るからね。』

『わたしも行くわ。』ネリは云ったけれども、ペムペルはもうかけ出したので、ネリは心配そうに半分泣くようにして、又看板を見ていたよ。

それから僕は心配だから、ネリの処に番しようか、ペムペルについて行こうか、ずいぶんしばらく考えたけれども、いくらそこらを飛んで見ても、みんな看板ばかり見ていて、ネリをさらって行きそうな悪漢は一人も居ないんだ。

そこで安心して、ペムペルについて飛んで行った。ペムペルはそれはひどく走ったよ。四日のお月さんが、西のそらにしずかにかかっていたけれど、そのぼ

んやりした青じろい光で、どんどんどんどんペムペルはかけた。僕は追いつくのがほんとうに辛（つら）かった。眼がぐるぐるして、風がぶうぶう鳴ったんだ。樺（かば）の木も楊（やなぎ）の木も、みんなまっ黒、草もまっ黒、その中をどんどんどんペムペルはかけた。

それからとうとうあの果樹園にはいったのだ。ガラスのお家が月のあかりで大へんなつかしく光っていた。ペムペルは一寸立ちどまってそれを見たけれども、又走ってもうまっ黒に見えているトマトの木から、あの黄いろの実のなるトマトの木から、黄いろのトマトの実を四つとった。それからまるで風のよう、

あらしのように汗と動悸（どうき）で燃えながら、さっきの草場にとって返した。僕も全く疲（つか）れていた。

ネリはちらちらこっちの方を見てばかりいた。

けれどもペムペルは、

『さあ、いいよ。入ろう。』

とネリに云った。

ネリは悦（よろこ）んで飛びあがり、二人は手をつないで木戸口に来たんだ。ペムペルはだまって二つのトマトを出したんだ。

番人は『ええ、いらっしゃい。』と言いながら、トマトを受けとり、それから変な顔をした。

しばらくそれを見つめていた。

それから俄(にわ)かに顔が歪(ゆが)んでどなり出した。

『何だ。この餓鬼(がき)め。人をばかにしやがるな。トマト二つで、この大入の中へ汝(おまえ)たちを押(お)し込(こ)んでやってたまるか。失(う)せやがれ、畜生(ちくしょう)。』

そしてトマトを投げつけた。あの黄のトマトをなげつけたんだ。その一つはひどくネリの耳にあたり、ネリはわっと泣き出し、みんなはどっと笑ったんだ。ペムペルはすばやくネリをさらうように抱(だ)いて、そこを遁(に)げ出した。

みんなの笑い声が波のように聞えた。

まっくらな丘の間まで遁げて来たとき、ペムペルも俄かに高く泣き出した。ああいうかなしいことを、お前はきっと知らないよ。

それから二人はだまってだまってときどきしくりあげながら、ひるの象について来たみちを戻(もど)った。

それからペムペルは、にぎりこぶしを握りながら、ネリは時々唾(つば)をのみながら、樺の木の生えたまっ黒な小山を越(こ)えて、二人はおうちに帰ったんだ。ああかあいそうだよ。ほんとうにかあいそうだ。わかったかい。じゃさよなら、私はもうはなせない。じいさんを呼んで来ちゃいけないよ。さよなら。」

斯(こ)う云ってしまうと蜂雀(はちすずめ)の細い嘴(くちばし)は、また尖(とが)ってじっと閉じてしまい、その眼は向うの四十雀(しじゅうから)をだまって見ていたのです。

　私も大へんかなしくなって

「じゃ蜂雀。さようなら。僕又来るよ。けれどお前が何か云いたかったら云ってお呉(く)れ。さよなら、ありがとうよ。蜂雀、ありがとうよ。」

と云いながら、鞄(かばん)をそっと取りあげて、その茶いろガラスのかけらの中のような室(へや)を、しずかに廊下(ろうか)へ出たのです。そして俄かにあんまりの明るさと、あの兄妹のかあいそうなのとに、眼がチクチクッと痛み、涙(なみだ)が

ぼろぼろこぼれたのです。
私のまだまるで小さかったときのことです。

底本：「新編　銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社
1989（平成元）年6月15日発行
1994（平成6）年6月5日13刷
入力：土屋隆
校正：noriko saito
2005年3月17日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。